



## 佳作

書評 角田光代著『曾根崎心中』（リトルモア 2012）  
（和泉開架 913.6/393//W）

文学部 3年 藤倉 雪絵

これは紛れもなく「恋愛小説」である。恋に時代や歴史などは関係ないのだという著者角田光代のメッセージが浮き彫りにされた、純粋な「恋愛小説」である。『曾根崎心中』という作品名は、文学史や日本史を学んだ経験の有無に関わらず、ほとんどの人が聞いたことがあるはずだ。この作品名から愛し合う男女が死という結末を自ら選ぶ物語であることはたやすく想像できる。しかし、彼らに死を選ばせる程の愛情というものがどれ程激しく、またある種のエネルギーに満ちたものなのかを知る人はそう多くはないだろう。

近松門左衛門が描いたこの物語を、あの角田光代が現代小説として書いたということに私はとても納得した。角田光代がこれまで描いてきた小説は、「女の物語」である。そこには、人生を大いに生きる女性がリアルに描かれている。角田光代が描く女性は、いつもどこか殺伐とした雰囲気をもっており、劇的な展開というよりも日常の中に生まれるあくまで主観的な「事件」を題材にしている。しかしその物語には圧倒的なエネルギーが宿っており、読んでいる者の心情をえぐるようなものばかりである。このような角田光代の描く熱量を持った女性像と、近松の『曾根崎心中』のヒロインお初の恋心は、そういった意味で激しく共鳴した。

物語はおおかた原作通りの展開を見せるが、終盤でお初が徳兵衛の無罪を疑う場面は、原作にはない描写である。ここに角田光代独特の世界観が生まれ、物語を著者が「自分の作品」に仕上げていることがよくわかる。愛する男が嘘をついているかもしれない、しかしそれがなんだというのか。お初が抱くこの感情の強さと勢いによって物語はラストシーンへ加速していく。繰り返しになるが、この作品は「恋愛小説」である。『曾根崎心中』という作品を現代の人々にとってわかりやすいものにしようという意図で書かれたものでは決してない。原作よりも遥かに女の感情というところにクローズアップされた視点は、昔の物語だとは思えない程の鮮やかさと、残酷さを持っている。

原作を元に描かれた全ての作品、それは小説に限らず、映画でも音楽でもあてはまるのだが、そういったいわゆる「リメイク版」とされる作品は、原作を超える超えないという点で議論すべきものではないと私は考える。重要なのはその「リメイク版」が一つの作品として確立しているか否かではないだろうか。その意味で、この角田版『曾根崎心中』は彼女の小説家としての力量と熱量が合わさってできたれっきとした一つの「恋愛小説」であり、現代に生きる我々こそが感動できる、「昔」ではなく「今」の物語である。